

尾となり、花盤の剛毛は分岐するのと比較するに、これはこの兩群の地理的分布上からも兩屬は區別する方がよい様に思われる。

我が國には本屬に *Atractylodes japonica* Koidzumi mss. = *Atractylode lyrata* var. *ternata* KOIDZUMI, Fl. Symbolae Orient.-Asiat. (1930) p. 5. オケラと *Atractylodes koreana* (NAKAI) KITAMURA = *Atractylis koreana* NAKAI in Tokyo Bot. Mag. XLII (1928) p. 478. ショサウジュツとが一般で後者は従來朝鮮にのみ知られてゐたが滿洲大連 (30 jul. 1932 M. KOBAYASHI) 遼陽 (19 aug. 1928 M. NODA) に産する事が知られた。

Atractylodes lyrata SIEB. et ZUCC. は小泉先生のLeiden よりもらつて歸られ標品を拜見したが、これは草本圖説牧野版第十五卷五十二圖版 ホソバナヲケラであつて故松田定久氏が東大植物園より標品にされたものあるきり我が國の野生標品を見たことがない、草本圖説第一版には木曾に産すとあるさうであるが、標品を見ぬ限り支那から傳來したものか又は支那品と本邦のオケラとより作られたものか不明であるが兎に角オケラとは別種である。

抄 録

ハルリス氏：東部グリーンランドの三疊侏羅紀植物化石，第四篇。 (T. M. HARRIS:—The fossil Flora of Scoresby Sound East Greenland, part IV 1935, p. p. 1-176, t. t. 1-29.)

本篇には銀杏類、松柏類、石松類を記せり、松柏類には 13ヶの新屬を設立し、他は各一新屬を設立せり、其内最も吾人の注意をひくは石松類の *Grammaephloios* と云ふ新屬である、本屬は莖枝の厚さ 3.5 cm にもなる大石松であつて *Grammaephloios ichhya* HARRIS と稱す。大石松は元來古生代以外には發見されてゐない事であるのに今侏羅の下部 Liass に大石松の發見されし事は、上部 Rhaetic の大石松子囊穗なる *Lycostrobis* の存在と思ひ合されて、中生代の初め頃にも少許の大石松が存在した事が考へらるゝ。(G. KOIDZUMI.)

STAPP 氏：—石南科の新屬 *Botryostege* (O. STAPP:—*Botryostege*, A New Genus of Ericaceae, in Kew Bull. 191-195, with Pl., Aug. 1934)

先年物故せられた O. STAPP 氏の遺稿で日本特産のミヤマホツツジに對する新しい見解である、氏は此の植物は北米産の *Elliottia* 及び本邦産の *Tripetaleia* とは五全裂する萼片と、苞とが葉狀に成つて居る點で區別さるべきものであるとの意見で

Oct. 1935.

179

ある、又北米太平洋岸に分布する *Cladothamnus* にも酷似して居るが花が萼の外はその數から成つて居る點が相違すると云ふ 従つて此の植物は唯一種を含む *Botryostege* STAFF なる新屬となり、*Botryostege bracteata* STAFF の名で呼ばれるべきであると、（大井次三郎）

テリオール氏：——**ジュール カルド** Jules CARDOT (1860-1934) par I. THÉRIOT.—*Revue Bryologique et Lichénologique* 1935, p. 5-13.

佛國の蘚類學者 J. CARDOT に關して、同國の I. THÉRIOT が一文をものしてゐる。所々抄録して見る。

1860年に生れた。1880年頃より蘚類に興味を持ち 1914年に歐州大戰の爲 標本藏書を失ひ 蘚類研究を斷念せねばならぬ様になつたまで、彼は非常な精力をもつて 廣く全世界の蘚を研究の對象とした。その活躍をながめると他學者との共著を含めて 40屬を建設し新種は 1200種に及んだ。THÉRIOT は随分多くさん書いたと評してゐる、その記載は明確にして正確であり、他種との比較を委く書いた最初の人であり、且つ正確にてしかも美術的な圖を以て説明してゐることは氣持がいい程であると、THÉRIOT はほめちぎつてゐる。新種を作るのみならず、蘚類學に關するあらゆる方面に關心を持ち仕事をした。

Monograph としては、有名な “*Recherches anatomiques sur les Leucobryacees*” があり、1892以後の *Fontinalaceae* の仕事も優秀である。命名規約に關する意見も *Revue bryologique* (1913) に見へ、“*Note sur la flore de l'Antarctide*” 及び晩年の “*Contribution a l'étude du peuplement des îles britanniques*” の兩論文は、地理的分布を考慮に入れたすぐれた同時に之の方面の最初とも言ふべき論文であつた。

Académie des Sciences は彼の仕事を高く評價し “*Recherches anatomiques sur les Leucobryacées*” に對しては、1900年に Montagne 賞を、“*Flore bryologique des terres Magellaniques*” に對しては 1906年に、“*Mousses de Madagascar*” に對しては 1916年に、それぞれ Desmazieres 賞を、又政府は 1923年に Légion d'honneur の勳賞を與へた。以上が 1914年不幸におそはれるまでの、蘚と共に暮した彼の第一の生涯とそれがやかしいむくひである。1915年-1917年には Muséum national で顯花植物の研究に送り、1917年-1931年には印度支那政府にあつて農業方面に關する仕事があつたと聞く。1919年には残つた？標本も、財政的不幸の爲に之を手離さねばならなかつたとは之上なく不幸な人であつたと評せねばならぬ。かくして 1914年の不幸